

# お茶の水時代 (完)

— 思ひ出をたどる —

○

和田 實

御茶の水の幼稚園が、愈々大塚の新園舎に引移るこゝになり、六十年の歴史に、一轉期を劃するこゝになつたに就いて、二十五年の昔を想ひ出して、何か書く様に云ふ御註文、大した面白いお話もないとは思ひますが、歴史のつなぎに云ふ意味で、思ひ出るまゝを書いて見ませう。併し數年前堀主事の時にも同様の御註文で、何か書いたと思ひますから、或は夫れを重複するこゝがあるかも知れませんが、其邊は御許しを願ひます。扱て、私の御茶の水に奉職したのは日露戰爭の直後でした。幼稚園には本園に三組百二十人、分室に一組六十人があつて先生は各組に主任の保姆が一人づゝの四人と助手が二人全體の主席保姆が一人居りました。子供は九時の始まりに八時頃から、やつて来るものもあつて、九時になるに、小使が振鈴して授業が始まるのでした。全く學校の形式を採つたものです。振鈴を聞く子供は夫々自分の組の部屋に入つて、保姆の來るのを待つて居ます。頼がて保姆が來るに、一ミ挨拶して、一同を遊戯室に導きます。本園一同が集まるに、茲で唱歌や遊戯なごをなし、時にはお話や訓戒なごもあつて、所謂會集を終ります。夫れから、また、各組の部屋に戻つて、保姆は、出席を調べた後、唱歌、談話、手技、等夫々其組の豫定の保育事項に取掛るのでした。そして、各

室の入口には小さな時間割に一週間分の仕事の種類を掲示するこは、今日の小學校を全く同じこでした。室の中は保育第三年の組も同第二年の組も幅三尺長六尺の卓子に向ひ合つて著席するものが、四つ又は五つあつて、室の中に、適宜に配置されて居ました。一番小さい保育初年の組は卓子が間に合はないので、元の小學校風の二人掛の机を四字に並び、之に著席して居ました。此机の表面には兒童用の積木の大きに合はせた碁盤目が刻んであつて、積木で遊ばせるこきの整頓の基準になる様になつて居りました。併し、是も暫時の後には、大きい卓子に代へられて、外の組も同じ様な體裁を整へる様になりました。先生方は能く子供を調和して、遊ばせては居りましたが、形式の上からは、全く學校も同様で就學以前の子供も云ふ感じはありませんでした。それから、半年ばかり経つ中に、室の入口の時間割は自然に必要を感じなくなり、何時の間にか取り去られて差支ない様になつて仕舞ひました。併し、夫れでも、會集するこも、午前に二度の入室を午後一度の入室は、殆んど既定の様にきちんとして行はれて居ました。是が、追々子供の遊ぶ状態に連れて、臨機に變更される様になりましたが、此状態で、私の任務が、小學校の方の専任になるまで、即ち明治天皇の崩御の年まで續きました。

保育法の内容としては、當時、中村五六先生の保育法も云ふ本も東基吉先生の幼稚園保育法も云ふのが、權威で大體は此書の内容が實行されたものでした。併し何方か云ふ書物の指導する内容よりは、保姆の先生方の實際の保育其ものの方が、餘程理論的には進歩して居るものでした。段々、先生方の實際にして居るこを觀察した結果、保育法其ものを、此現在先生方の實行して居る實際に即して、新に建直す必要があるこを痛感しました。即ち、當時の保育法も稱する書物は、此實際の保育を説明するものとしては、極めて時代遅れの感があつたのであります。そこで、明治三十九年に保育實習科が設けられて、其教育科の教授をしなければならなくなつたのを幸に、保育法を根本から建て直す共に、教育學も現在の様に小學校の教育學として、なく、普通教育の全般に亘り、幼児教育をも、包含する教育學として、組

織し直して、教授するこゝにしました。此新組織に因つた保育法が、「幼児教育法」云ふ名稱の書物となつて、日本幼稚園協會の前身フレールベル會から、出版されて居ましたが、當時こゝしては餘りな急變事な爲めか、餘り注意はされませんでした。私が此新保育法の大要を、幼稚園の保姆先生方に講演した時に、倉橋惣三先生（當時新に赴任された頃で、時は明治四十五年の初めに）批評を求めたらば、先生は、餘りにオリジナルな部分が多くて批評し悪い」云はれた位でしたから、他の人には逆も批評的に見るこゝは出来なかつたのかも知れません。兎に角、私の新保育法は殆んど教育者の黙殺に遇つた様なもので、誰も批評もして呉れなければ、贊成もして呉れもせず、不遇で今日迄來てしまいました。

併し私は今日でも保育は教育の一部であり、教育學が教育の全般を説明す可き科學である以上、保育法は當然、教育より演繹せられねばならぬもの之信じて居ます。教育學者云はれる人が、何故、幼児教育を、教育學の對象外に置くか、實に、不審の極みなのですが、一方から云へば、幼稚園保育の指導者が、保育は教育に非らず云ふ建前の下に、保育の理論を教育學者に聞かず、専ら直接に、心理學者からの指導を受くるのに満足して居る結果ではないかと思はれます。保育の理論は果して教育學の圈外に置かる可きものでせうか。

私が奉職中、私の一身上に探つて、此上もない打撃は、何ぞ云つても、時の校長高嶺秀夫先生の逝かれたこゝでした。先生は實に大教育家でした。幼児教育に就いても深い理解がありました。幼稚園には和田が居る云ふこゝを他の人にも云はれて居られました。併し萬事は終りました。私は明治四十五年の四月に小學校の方の専任になつて、御茶の水の幼稚園は絶縁するこゝになつたのであります。爾來、二十餘年、保育界は倉橋教授を初め權威ある方々の御指導に因つて、内容的には偉大な進歩を遂げました。此上にも益々進歩するこゝでせう。茲に於て、愈々益々其必要を感じるのには理論的統制の必要なこゝです。既刊の保育に関する書物は理論的に現在の保育を説明しては居らず、亦同時に、將來の保育の趨勢をも暗示しては居らず、無論、教育學的統制を缺いて居るものであります。保育を教育學中に統一し、完全なる理論を

保育者に與ふることは斯界指導者の任務でなければなりません。



## 大 關 二 よ

ボカボカ暖かい日ざしが、お山や砂場や花壇や藤棚や、まごもかも一ぱいに流れ渡つてゐる。子等は、伸びんこする全身の力を、思ふ存分に發揮して、嬉々々遊び廻つて居る。それは、花信しきりに傳へられる春でもよければ、落葉の錦が大地を包む秋でもよい。花に戯れる蝶々の如く、木の實を啄む小鳥の如く、その生命は自然の間に融け込んでしまつて、天地は將に一大樂園を示すものである。

かゝる時、少しお辨當を早く濟ませて、お隣の聖堂へ遠足を試みるのは、この上もない彼等の喜びである。二人づゝ仲よくお手をつないで、藤棚を通り、小學校の校舎を通り、女學校の側を過ぎるま、境の堀がある。小使に、鍵を開けてもらった、小さな門をくゞるま、そこはもう聖堂の構内なのである。徳川家康の世に天正以來の兵亂治まつて、これから世は泰平にならうとする時、まづ一國の統治は文教を興すにありま觀じ、林大學頭をして、本郷湯島臺に文教の淵源を定めしめ、孔子の尊像を安置して、精神教育の基をこゝに置きてより、幕府十五代の間、幾多の學者がこゝで思を練つた事であらう。足ひきたびこの地を踏めば、老樹亭々まして天を摩し、子等の歩む土の色は、漆黑に青い苔のむした所さへあるのである。左に進み右に折れ、古い建物の傍を過ぎるま、古色蒼然たる石段がある。幾百人の學生に、踏み固められた石の一つ一つは、土の中に半ばうつもれて、草なぎ生えて居り、角も丸みてあれば、子等の歩むにも、些の危険もない。段を登るま又門がある、質素な黒い作りではあるが、正面遙かに聖廊を拜しては、何まなく敬虔の念が湧く。然し子等には、そんな連想は一つもないのは勿論である。